

No. 356【2019年5月17日配信】

野内川のシロウオ漁(担当:鈴木)

さわやかな風が心地よい季節となりました。

この時期に行なわれるシロウオ漁は、青森県の春の風物詩ですね。そのひとつ野内のシロウオ漁は、それに関する記述が18世紀初めの記録に見られ、また、江戸時代末の旅行小説『御国おくに巡覧滑稽嘘盡戯』にも「野内川のシロヲ」漁が登場するなど、古くから行なわれていたことがわかります。

シロウオは透き通った体を持つハゼ科の魚で、漢字では素魚と書きます。4月から5月にかけて産卵のため海から川の下流に戻るところを漁獲し、青森県では野内川のほか蟹田川、野辺地川でも漁が行なわれています。

現在、野内川では河口の両岸にやなば築場が設けられ、地元の方々によるよつであみ四手網を使った漁が行なわれていますが、かつては青森の市街地の人々も徒歩または鉄道を利用して野内に出向き、行楽としてシロウオ漁を楽しんでいました。



野内のシロウオ漁
(『新青森市史』別編3 民俗より)

明治・大正時代の『東奥日報』には、野内川のシロウオ漁に出かけた記事が見受けられ、また『原別百年のあゆみ』(原別村村制施行百年記念誌編集委員会 1990)によれば、昭和初年頃には原別側の野内川岸に青森市内の飲食店、料理屋の出店が開かれ、「白魚狩」で賑わったそうです。

そこで今回は、大正5年(1916)5月24日付『東奥日報』に掲載された「野内川の白魚狩」という記事をご紹介します。

青森市鍛冶町（現本町1・2・5丁目および橋本1丁目付近）の度量衡修覆所では、5月21日の日曜日、工場員の慰安のため野内川の行楽に繰り出しました。メンバーは西所長と工場員ら総勢20数名に芸妓さん数名も加わりました。

その頃の野内川の河口は、広い川原に幾筋もの浅瀬が流れ、裾をまくりあげた人々はジリジリする陽射しの下、初夏の風をうけながら川に入り透き通ったシロウオを網ですくいます。行李の^{こうり}生簀には初冬の氷柱のような美しく繊細なシロウオが一杯になり、ときに15センチ以上のイワナが自ら網に飛込んで来たりするのは筆舌に尽しがたい楽しさです。

炊事係は川原に石でカマドをつくって酒の燗をつけ、野内川の水で白魚汁をこしらえます。鉄橋の下にゴザを敷き、準備が整ったら宴会を開始！ 持参した折詰を開き、獲れたてのシロウオで作った汁を味わい、酒を酌み交わします。空にはカモメが飛び交い、名も知らぬ鳥がさえずって、社員たちはのんびり休日を楽しんだのでした。

5月の青森は花や緑が美しく過ごしやすい季節！市街地から7キロほどの野内川河口は、春から初夏にかけて行楽にちょうどよい場所だったのでしょね。